

～ 輝 きの 子 育 て ～

吉田松陰の言葉

高市早苗首相の誕生に当たって、日本維新の会の藤田文武共同代表が吉田松陰の言葉を引用したり、首相も別の場面で引用する場面がありました。

藤田氏は代表質問で

「死して不朽の見込みあらばいつでも死ぬべし。生きて大業の見込みあらばいつでも生くべし」

（意識）自分の死によって、志が達成できるなら、いつでも死ぬべきだ。しかし、生きていることで、大きなことを成し遂げられる見込みがあるなら、生きて成し遂げるべきだ。

政治家の存在価値は政策実現の一点にあるということを語ったのでしょう。

藤田氏は自民との合意文書を交わした翌日に

「狂愚まことに愛すべし、才良まことにおそるべし。諸君、狂いたまえ。」

（意識）狂気と言える程の情熱を持って常識から外れる者は、真に行動を越している愛すべき存在である。これこそ改革への志を持つ我々政治家全員が胸に抱くべき精神ではないか。諸君、狂いたえ。高市さん「狂って下さい」「わかった！やるか！」と答えたそうです。

高市首相（所信表明演説）

「事を論ずるには、^{まさ}当に己の地、己の身より見を起こすべし、すなわち着実と^な為す。」

（意識）天下国家のことについて意見を述べたり論議したりする際には、当然乍ら自分の暮らしている場所や自分の立場、自分自身の経験に基づいて考え始めるべきである。頭の中で考えたような口先だけの意見では説得力に欠ける。

こういった言葉が飛び交う政治に期待したいと思います。久々に政治に期待したい気持ちになってきました。

今から20年程前に、山口県萩に旅しました。

長州藩の藩校、明倫館の流れを汲む、明倫小学校では、1学期に1つ松陰の言葉を、毎朝、朗唱しているそうです。6年間で18の言葉になります。教えられる言葉は良くわからなくても、一人一人の人生の節目で理解できるようになるという信念で行われています。（今も続いているかどうかは確認していません。）その18の言葉から2、3抜粋してみました。

1「今日よりぞ、^{おさなごころ}幼^す心を打ち捨てて、人と成りにし道を踏めかし」（1年生一学期）
（意識）今までは、親にすがり甘えていたが、小学生になった今日からは、自分のことは自分でし、友たちと仲よくしよう。

2「^{およ}凡^{こう}そ、読書の功^すは、昼夜を捨てず、^{すんいん}寸陰^{これ}を惜しみて^{はげ}是を励むにあらざれば、其の功^{こう}を見ることなし」（4年生一学期）
（意識）読書の効果をあげようと思えば、昼と夜の区別なく、わずかの時間をも惜しんで一心に読書に励まなければ、その効をみることは出来ない。

3「人^{けんぐ}賢愚ありと^い雖^{えど}も、各々一、二の才能なきはなし、^{そうごう}湊合して大成する時は必ず^{ぜんび}全備するところあらん。」（3年生三学期）
（意識）人には、それぞれ能力に違いはあるけれども誰も一つや二つの長所をもっているものである。その長所を伸ばせば、必ず立派な人になれるだろう。ほっとしますね。

4「親、思うところにまさる親心、きょうの^{おと}音^{おと}ずれ、何をきくらん」
（意識）処刑1週間前のもの、30歳の時。この便りを知って、両親はどんなに悲しむことであろう。

このような、偉人の言葉を読むことは、人生に何かとプラスになると思います。

余談乍ら、高市首相は、両親から厳しくしつけられたそうです。徹底して教えられたのは「他人に迷惑をかけない」「職業に貴賤なし」「他人の悪口は言わない」「ご先祖様に感謝する」

又、幼い頃に両親から「教育勅語」を暗唱させられたそうです。それは高市家代々の「家訓」のようなものだそうです。

父親は機械メーカーに勤めるサラリーマン、母親は奈良県警の警察官

片野 英司

吉田松陰（1830－1859）

幕末の志士、長州藩士。兵学に通じ、江戸に出て、佐久間象山に洋学を学ぶ。常に、海外事情に注意し、1854年米艦渡来の際に、下田で密航を企てて投獄。後に萩の松下村塾で幕末、明治期の指導者を教育。安政の大獄に連座し、江戸で刑死。